

【共通の設問】次の傍線部「に」を識別せよ。(答え・解説は解答編)

【第1部】基礎編 (Q1～Q20)

- Q1.
花咲きにけり。
- Q2.
男にありけり。
- Q3.
静かに眠る。
- Q4.
京に行く。
- Q5.
雨降るに、出でず。
- Q6.
春過ぎて夏来にけり。
- Q7.
あはれに思ふ。
- Q8.
山に入る。
- Q9.
往にけり。
- Q10.
げにさも侍る。
- Q11.
都にありけり。
- Q12.
つひに雪降りぬ。

Q13.

夕方に着く。

Q14.

花咲くに、人来たる。

Q15.

死にぬ。

Q16.

あらたに造る。

Q17.

母に会ふ。

Q18.

花咲きにたり。

Q19.

御使ひに侍り。

Q20.

すでに夜更けぬ。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21.

月出でにけり。

Q22.

男におはしけり。

Q23.

あはれに侍り。

Q24.

夜更くるに、なほ語る。

Q25.

京にのぼる。

Q26.

露置く秋になりぬ。

Q27.

衰れにもあるかな。

Q28.

死にたる人。

Q29.

ことさらに急ぐ。

Q30.

道に迷ふ。

Q31.

花咲くに、雨降れり。

Q32.

我れ古典の道にあらず。

Q33.

都人に侍り。

Q34.

山に入る人なし。

Q35.

雪降り出でにけり。

Q36.

寒げに見ゆ。

Q37.

我にな問ひそ。

Q38.

のどかに過ぐ。

Q39.

いかにせむ。

Q40.

帰るに帰られず。

Q41.

げに思ふ。

Q42.

海に漕ぎ出づ。

Q43.

ことば多きに、心せばし。

Q44.

御所に侍り。

Q45.

あらたに起こる。

Q46.

寝（ね） にけり。

Q47.

雪深きに、道見えず。

Q48.

都には花咲きにけり。

Q49.

夜半におどろく。

Q50.

をかしげにものし給ふ。

【第3部】 応用編（Q51～Q80）

Q51.

あはれにおぼしめす。

Q52.

風のどかに吹く。

Q53.

我は男にこそありけれ。

Q54.

大納言にぞありける。

Q55.

知るに及ばず。

Q56.

物のあはれを知らぬ人にもあらず。

Q57.

庭の様子いとあやしげに梅の花…

Q58.

あはれに思ひ給ふ。

Q59.

名月に雲ある。

Q60.

心ゆるに待ちぬ。

Q61.

雨降るに、なほ来たる人なし。

Q62.

神に祈り給ふ。

Q63.

露にもぬるる袖。

Q64.

飽かずに別る。

Q65.

御供仕うまつるに、御車止まりぬ。

Q66.

あらはに仰せらる。

Q67.

庭に月さしけり。

Q68.

静かに思ひ侍り。

Q69.

思ふにたがふ。

Q70.

月にぞ宿る。

Q71.

あけぼのにこそ。

Q72.

鳥にな慕はれそ。

Q73.

待ちに待ちたれども、来ず。

Q74.

名月に雲、花に風。

Q75.

をかしげにおはす。

Q76.

親に孝なる人。

Q77.

行く春に惜しまるる人。

Q78.

神に祈る。

Q79.

嵐に散る花。

Q80.

言ふに言はれず。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81.

男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき国求めにとて行きけり。

Q82.

いつぞやの事なりけむ。月の出づるを見つけたる人ありて、「あれは何にか」と問ひければ、隣の翁、「月にこそあれ」と答ふ。

Q83.

京にて生まれたりし女子、国にてにはかに失せにしかば、このたび、はやくと思ふ心あり。

Q84.

五月雨を集めて早し最上川――この句、芭蕉が出羽の国にて詠ぜしものにこそ。

Q85.

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまり候ふに、「少納言よ、香炉峰の雪、いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。

Q86.

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに、「隆家こそいみじき骨は得て侍れ」と申し給ふ。

Q87.

あけぼのに起き出でて、東の空をながむ。

Q88.

いとほしき御けはひに、上に心も乱れて、「げに、かばかりの罪、深かるべし」と思ひ給ふ。

Q89.

折節の移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ。

Q90.

我は男にしあれば、女のかかる目に遭ふを見るも、心苦しき限りなり。

Q91.

よろづにいみじ。

Q92.

木の葉に埋もるる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

Q93.

あけぼのの空おぼろにかすめるに、人の声する。

Q94.

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし。

Q95.

心にかかれども、口に出さず。

Q96.

雪のいと高う降りたるに、几帳の帷子のさやさやと鳴る。

Q97.

ねぶたきも、人のけはひに、ふと目覚むるものなり。

Q98.

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけめ、これらは、ただ夢のごとくにぞある。

Q99.

物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふ。

Q100.

行く川のながれは絶えずしてしかも、もとの水にあらず。